

ボーダレスの拠点を目指そう

～退官の挨拶～

前電気通信大学長 梶谷 誠



4 年前に、学長に選出されるという予期せぬ事態が発生してから、あっという間に今日を迎えました。

平成12年5月1日に文部省で辞令を受取るや、そのまま学士会館で開催された臨時の国大協総会に臨みました。そこでの話題は、国立大学の法人化が本

格的に政治日程に上るらしいという事態に備えるためでした。私に課せられた使命を象徴する1日でした。そして、平成16年3月末日に、55年間の国立大学としての電気通信大学が閉幕すると同時に、私も学長を退任致しました。まさに、法人化の準備に明け暮れた学長時代でした。

私は法人化に対する基本的なスタンスや考え方を、大学の集会やさまざまな媒体を通して訴えてきました（例えば、目黒会報の巻頭論壇のシリーズ）。簡単に言えば、大学の本質は、設置形態（法人格を有するかどうか）にあるのではなく、その存在意義を社会が認めるかどうかにあるのです。私は、社会になくってはならない存在であるために、大学を「知のボーダレスの場」にしようと訴えました。学科や研究科の枠にこだわる様な見の小さいことはやめましょう。大学の運営や教育研究にも、学外の様々の分野から参加してもらいましょう。一般の教員は教育と研究に専念してください。事務職員や役職者の役割と責任を明確にして、日頃の仕事はまかせましょう。しかし、このような考えを十分に理解してもらえなかったことは、私の力量不足によるもので、ご期待に添えなかったことをお詫びせねばなりません。

今年の4月1日から、全ての国立大学（88大学と2短期大学）が国立大学法人へ衣替えして、例えば

国立大学法人電気通信大学が電気通信大学を設置して運営する形になり、国（文部科学省）の直接の管理から解き放たれたのです。これを機会に、各大学は非常に活発に新たな独自の道を歩もうとしています。電気通信大学も新しい役員体制の下で、心機一転、個性を一層輝かせる大学として飛躍してくれるものと期待しております。

通機会は、私たち通信機械工学科1回生が卒業する時に作りました。それが綿綿と（途中でしばらく休眠しましたが）続いてきたことは、この学科の伝統を象徴しています。教職員も卒業生も一体となって、学科を支える協調体制がとてもうまく機能しています。学科の外に出て、特に学長のような仕事をすると、それぞれの学科の性格が良く分かります。また、この学科の設立は、昭和35年ですが、非常に革新的で、当時の常識を超えた英断でした。われわれは、このときのことを忘れないようにしたいものです。いつも世の中の進むべき方向を自ら提言できる気概を持って、新しいことに挑戦する、それが本学科の存在価値なのです。

ところで、電通大の教官の定年は65歳でしたから、もし教授のままでいたらあと2年間勤めることができました。学科からは、戻ってあと2年間居るようにとの有難いご提案もいただきました。しかし、学長になった時点で、4年間の務めが無事に終われば、電通大を去ることを決めていました。別にその後のことに予定や成算があった訳ではありません。

昭和46年に電通大の短期大学部に迎えていただいて以来、田中榮先生を始め多くの先輩諸先生や同僚の皆様、学生諸君、通機会の皆様に暖かい励みや支援をいただき、おかげで無事に退官（退官と言う言葉が使える最後のチャンス）できました。実に楽しく仕事ことができました。まことに感謝に耐えません。ほんとうにありがとうございました。

通機会のますますの発展と会員の皆様のご活躍を祈念申し上げます。

梶谷先生のご退官記念講演会及び懇親会

梶谷誠先生退官記念会 下条 誠

平成 16 年 6 月 12 日(土)に梶谷先生のご退官記念講演会及び懇親会が開催されました。気にしていた天候にも恵まれ、講演会には約 483 名、懇親会には 289 名の多数の皆様にご来臨頂きました。

梶谷誠先生は、昭和 39 年本学通信機械工学科を卒業後、昭和 46 年に本学に着任され、以来 33 年間に渡り本学の発展にご尽力されました。平成 12 年 5 月には電気通信大学長に任命され、平成 16 年 3 月末日任期満了により学長をご退任されました。現在は、国立大学法人信州大学監事、コラボ産学官理事長としてご活躍されています。

講演は「研究者と技術者の狭間で 35 年」と題し、研究者の立場と技術者の立場での経験を中心に、世界的業績となった歯車計測及び角度計測の話、世界に先駆けて開発した楽器演奏ロボットの話し等、先生の研究生活の系譜をユーモアたっぷりにご紹介されました。

懇親会は場所を移して調布市文化会館たづくり 12 階を借り切り行いました。開会は、「梶谷記念祝祭金管アンサンブル」によるオープニング・ファンファーレのあと、調布市長の乾杯により始まりました。梶谷先生からのご挨拶では、本学に対する長年の感謝の言葉が述べられ、大学への寄付として 500 万円が益田学長に送られました。

当日は、予想を超える参加者のため、特に懇親会場が混雑してご迷惑をおかけいたしまことお詫び申し上げます。梶谷先生ご夫妻もとても喜んで、楽しんでおられました。



大学の法人化について

知能機械工学科教授 石川 晴雄

本年 4 月より全国のすべての国立大学が法人化されました。法人化によっていくつかの大きな変化が生じています。従来は国立大学ですから、大学の設置基盤は国であり、各大学はいわば文部科学省の出先機関でしたが、4 月以降は各大学が独立した法人となりました。したがって大きな自由裁量権を得るとともに、責任の範囲も広範囲になりました。大学が独自に立てた目標と計画(第一期は 6 年間)にしたがって運営していくことになります。

最も基本的で重大な変化は教育・研究に関わる経費(人件費も含めて)です。本年度は昨年度実績の総額がそのまま文科省から運営交付金として支給され、その用途内容は大学の自主的判断に任せられました。用途が適切であったかどうかは第一期終了時に評価され、その結果により第二期の交付金が増減されます。同時に一期の期間中であっても毎年運営交付金は減額されます。したがって明らかに運営交付金の配算には教育・研究上の業績が目に見える形で生じるような経営的・効率的戦略が要請されます。また、その結果として大幅な外部資金の導入が極めて重要になっています。

経済的な観点だけではなく、国内外の企業等との共同研究や地域社会との連携とその広報など、広く深く社会との交流を今まで以上に図ることが要請されています。

教育においても、18 歳受験者人口の減少の中で、いい受験者を多数集め、優れた学生を社会に送り出すための教育内容の充実が大学の発展には必須です。

その他、教職員の身分の非公務員化、独自の給与体系、構成員の代表組織との団体交渉などの民間企業並みの多くの新しい適用を受けます。

重ねて述べますが、法人化ということは、様々な状況に対して大学独自の判断で計画を立案・実行し、その結果について外部機関から評価され、自らが責任をとるということです。

大学は大きく変化しようとしています。卒業生の皆様のご支援もよろしく願います。

文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」とロボメカ工房について

今号では、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された本学の「楽力によって拓く創造的ものづくり教育」(代表：知能機械工学科 石川晴雄教授)と、その中心的役割を担うロボメカ工房の活動について紹介します。

がくりょく

楽力によって拓く創造的ものづくり教育

知能機械工学科教授 石川 晴雄

昨年、文部科学省は「特色ある大学教育支援プログラム」として各大学、短大における教育実践例を公募しました。電通大からは知能機械工学科を中心とし、電子工学科、情報工学科とともに、表題のタイトルでこれに応募しました。その結果、9月におよそ十倍の競争率で採択されました。

電通大は大学の理念としても、ハードからソフトまで含めた広い意味でのものづくり教育を重要視してきましたが、それを特徴的に展開してきた内容が今回の採択となりました。

1995年機械制御工学科にロボットメカトロニクス創造工房(略称：ロボメカ工房)を学生の自主的な活動で、かつ教員も支援するクラブ的な活動として発足させたのが最初でした。その理念はものづくりを楽しむことのできる能力(これを楽力と呼んでいる)を涵養することが最も重要である、というものです。また楽力の涵養には、明確な目標、自由な発想、競争的環境、自発能動の学習、達成感が必要であると考え、これを実現する手段としてコンテスト参加形式を導入しました。この形式はその後、情報工学科(ソフト開発)、電子工学科(電子機器、装置開発)においても採用され、大学として大きく発展してきています。この活動はまた下級生と上級生のチームワーク活動でもあります。

現状では大学内で主催するコンテスト(新入生歓迎コンテスト、ロボットアイデアコンテスト、エレクトロニクスコンテストなど)や大学外の数多く(12種類)のコンテストに参加し、毎年多数の入賞を果たしています。本年度より参加対象学生を学部全体に拡張し、かつ授業の一環としての位置付けも行い、コンテストを授業活動の検証の場として発展させていきます。文科省からさらに3年間の予算措置もいただけることになりました。このようなものづくり教育の実践を電通大の大きな特

徴として、世の中にアピールしていきたいと思えます。

「楽力」教育ホームページ

http://ssro.ee.uec.ac.jp/lab_tomi/GP/index.html

ロボメカ工房の取組が教育賞を受賞

知能機械工学科教授 下条 誠

本学科のロボメカ工房に対する取組が日本機械学会教育賞を受賞した。(受賞者：石川、明、前川、田中(孝)、金森、敬称略)。同工房は、それまで研究室や教官個人が行っていた活動を組織化する形で山藤先生、梶谷先生の尽力により1995年に設立された。その目的は、学生個人・グループが研究者の指導やアドバイスを受けながら自分達のアイデアを具体化する場を提供し、ものづくりと工学のかかわりを体験させることにある。同工房の取組は以下のものである。

大学の新生や初心者に向けた教育啓蒙活動：

新入生ガイダンスにおいて工房の目的と活動内容について紹介し、講習会を行い、新入生歓迎ロボットアイデアコンテストを開催する。

大会に参加するための競技部門の活動：

競技部門は現在、NHKロボコン部門、かわさきロボット部門、ロボットグランプリ部門などの他に、今年度新たにレスキュー部門、VR(バーチャルリアリティ)部門が加わった。これらの競技部門は、一人で製作可能な競技から、数人～数十人のチームで参加するような多種多様なものを用意している。各人の技量、興味に応じたさまざまな大会を目指すことで、主体的にかかわることが可能となっている。また、各部門に担当教官を置き、各種相談に応じる体制をとっている。これまでに日本機械



日本機械学会教育賞賞状

学会，精密工学会等から60以上の賞を頂いている。

学科の支援体制：

製作作業のための常設場所を提供し，NC機などの機械加工機，CAD/CAMソフト，回路基板製作機など，ものづくりに必要な各種道具の整備を行っている。また，教官だけでなくロボメカ工房のOBや研究室の大学院生も，できる範囲で相談にのり指導することで，多少困難な課題や，これまでに経験のない分野についても挑戦できるような支援体制をとっている。

優秀作品の展示，表彰：

優秀作品を展示，実演するスペースを学内の創立80周年記念会館内に設置し，学科推薦により卒業時に同窓会より目黒会賞が授与されている。

第6回ロボットアイデアコンテスト

知能機械工学科助手 長塩 知之

ロボメカ工房では，毎年，工房学生が製作し各種学外コンテストに出場したロボットの展示会と，本学近隣の小中学生を参加対象としたロボット製作教室と競技会からなるJr. ロボコンを合わせたイベントとして，ロボットアイデアコンテストを開催しています。昨年は，1998年の第1回から数えて第6回となる大会を，本学の調布祭に合わせて，Jr. ロボコン製作教室：11月15日・16日，Jr. ロボコン競技会・工房ロボット展示会：11月22日・23日の日程で実施しました。展示会には，のべ411名の見学者にご来場頂き，また，Jr. ロボコンには，小学生24名，中学生4名が出場しました。このコンテストでは，ロボットを通じた青少年の理工学への興味の喚起，地域社会への貢献，並びに，コンテ



第6回ロボットアイデアコンテスト
「ロボ・トロッコ」決勝戦



平成15年度日本機械学会主催ロボットグランプリ
大道芸ロボット競技準優勝ロボット「A Cappella」

ストの運営全般を通じた工房学生の自主的活動の育成，を目的に掲げておりますが，年々，参加希望者，見学者は増加の傾向にあり，開催主旨に沿った成果を得られていると感じているところです。開催にあたっては，例年，通機会をはじめとする関係各位の皆様方から，後援，協賛を通じた多大なご支援を頂いております。この場を借りて心より御礼申し上げます。なお，今年は，11月20日・21日に第7回を開催すべく，現在準備を進めておりますので，当日は是非ご来場下さり，参加者，並びに，後輩学生へご声援を頂ければ幸いです。

講座紹介

先号に引き続き，知能機械工学科の講座紹介記事を掲載致します。今回は，ロボティクス講座の4分野について紹介します。

ロボット要素工学分野：本分野は，灰塚教授が担当している。当研究室は，1995年に成瀬教授定年ご退官後引継がれた。歯車は機械の至る所で使用されているので完成品と見られがちであるが，詳細に検討すると未知の部分が多いと共により高性能化の要望が強い。主な研究テーマは，諸歯車のトライボロジー；歯面強度では，ISO案浸炭焼入れ歯車の許容ヘルツ圧力PH 1.6GPaに対して2.4GPaを目指している。これが達成できれば，当歯車の歯面強度許容伝動力は約2倍となる。また摩擦損失及び騒音に関して，歯形誤差形状の影響を求めている。これは，運転性能に最適な歯形形状の追求でもある。AE(アコースティック・エミッション)を用いた歯面観察；歯車運転中に損傷が発生した

歯及び損傷位置の特定ができ、現在は損傷予知の確立を目指して進展中である。プラスチック歯車の強度特性、スキーのトライボロジー；学内複数の研究室との共同研究である。

メカトロニクス分野：本分野は下条誠教授、明愛国助教授、金森哉吏助手により運営されており、その研究分野は主にロボティクスとセンシング・計測システムに関するテーマに大別されます。研究室の歴史として特に精密計測には実績があり、日本の角度標準等を研究開発しました。また産学共同研究も積極的に行なっています。最近では人間の神経系と機械系の直接接続による感覚伝達、センサ用情報処理チップの開発といった、人間と機械とのインターフェース、バーチャルリアリティ技術そしてミックスドLSI設計技術の研究、ハイパーダイナミックマニピュレーション、ハイパーメカトロニクス機器の統合化設計など次世代技術を目指す新しいことにも積極的に取り組んでいます。実績も好調で、昨年はROBMECH賞など学会から3つ賞を頂きました。勉強も研究も面白く、学生の自主性を歓迎し、新しいことに挑戦するを合言葉とし、研究室ロボコン、月1回のコンパ、毎年の調布祭への参加などが伝統となっています。

知能ロボット分野：現在、ロボティクス講座知能ロボット分野には田中教授、大竹助手と学生19名(博士後期1名、博士前期12名、4年生6名)が所属し、ロボット・機械系を対象とした知能化システム・インテリジェント制御に関する研究に取り組んでいる。本研究室では国際的な研究活動をモットーとしており、その研究成果は広く国内外で認められている。これまでに、研究室全体で11件(海外5件、国内6件)の賞を受賞している。また、Boston University、Duke Universityなど海外の大学との連携による最先端の理論研究やトヨタ自動車、United Technologies Research Center (CT, USA)、石川島播磨重工業、Otis Elevator (CT, USA) など米国および国内のトップ企業との連携による最先端の実用化・応用研究も積極的に行っている。

制御工学分野：本分野は、木田教授、長塩助手が運営している。当研究室では、新規制御理論の構築、並びに、その機械システム、特に宇宙開発への応用について研究を行っている。最近の宇宙開発では、宇宙ステーションや大型の静止通信衛星、さ

らには、宇宙ロボットや月面着陸機など、次々に新しい計画が進められている。このような宇宙開発には、高度な制御技術が不可欠であり、理論面、応用面から問題の解決に取り組んでいる。現在の主な研究課題は、非線形最適制御問題、最適化計算アルゴリズムの構築、拘束を有するシステムの制御系設計問題、次世代宇宙機の制御系設計問題、移動体の遠隔誘導制御実験、などである。

特別講演会

- | | |
|-----|---|
| 題目 | 「Super Media Enhanced Internet-based Robotics」 |
| 講師 | Michigan State University
Dr. Ning Xi |
| 開催日 | 平成15年8月7日(木) |
| 概要 | スーパーメディア(映像、音声、触覚、温度等の観測情報)を用いたインターネットロボティクスを中心に、遠隔地間におけるテレオペレーションについてご講演頂きました。 |
| 題目 | 「世界最高速エレベータの開発と昇降機のリスク管理」 |
| 講師 | (株)東芝 永田 晃則 |
| 開催日 | 平成16年2月2日(月) |
| 概要 | 台北国際金融中心ビルに設置される世界最高速エレベータを例に、最先端の昇降機システムについてご講演頂きました。 |

卒業生よりの寄稿

卒業後、約4分の1世紀を経ての雑感

山梨県立甲府城西高等学校教諭 1979年卒 樋口 泉



本稿をご覧の皆様で、私をご存知の諸兄におかれましては、「なぜ、あの劣等生が、『通機会だより』に！」と紙面をご覧になっただけで、目玉が1メートルも飛び出してしまった方がいらっしゃいましたら、ごめんなさい。まずは、本紙に書かせて頂くことになった理由を述べさせていただきます。

私は、1979年3月に機械工学第二学科を卒業し、2002年6月31日に東京工業大学より工学博士の学位を認められ、7月31日に学位記を授与されました。この間の事は後述いたします。授与式の後、恩師である小泉博義先生を訪ねたところ、小泉先生より「非常に稀なケースなのでぜひ『通機会だより』に原稿を」と強く薦められて、つい調子に乗って引き受けた次第です。では、なぜ「非常に稀なケース」かといいますと、大学や研究所に勤務の方であれば博士の学位は当然必要不可欠で持って当たり前なのでしょうが、私の職業が、高等学校の教員だからだと思います。

高校生の頃、エンジニアリングに関係する仕事に就くか、高校の教員になりたいと思いながら電通大に入学しました。そのような理由から、就職を決めるときには民間企業および教員採用試験を受け、教員採用試験に合格したため高校の教員になりました。教科は工業科の機械です。山梨県では工業科(機械)の教員は7年ぶりの採用でした。採用時の校長先生が非常に先進的な考えを持った方で、既に1979年(昭和54年)当時、今日見られるメカトロニクスの進歩及びITの進歩を予測していたのか、「これからの工業科の教員は全員がコンピュータを教えられなければいけない。だからこそ、新人にはコンピュータに関する技術・技能が必修である。特に機械科の教員はコンピュータを避けて通っているので、新採用のうちに教育しなければいけない」と言って、新採用の私に文部省で行っていた「情報処理担当教員特別研修」を受けさせようとなりました。現在、教員の初任者研修において「情報技術」は必須科目になっています。しかし、この時は、「新採用教員研修があるので新採用の教員は研修には出せない」と教育委員会事務局の反対で研修を受けることはできませんでした。その5年後、7月末から9月上旬までの8週間、この研修を受けました。研修は大変勉強になり、持っていた知識の整理と新たな情報を仕入れることができました。翌年、上司の命令で、関東地区工業高校機械教育研究会で研究発表をする事となりました。これが認められたのか、その5年後の平成3年に1年間教育現場を離れて地元の山梨大学で研修する機会を得ました。研修題目は、「コンピュータによる機械の運動制御」で、ここ数年間で、また遅れてしまったコンピュータに関する知識を再構築することができました。そして、大学でたまたま知り合った(指導教官ではなかった)機械システム工学科

助教授 澤俊行先生に勧められるまま、研修終了後も大学に出入りし、衝撃負荷を受ける接着接合部の強度に関する実験と有限要素法による接着部の応力分布及び伝播についての計算を行ないました。そして、結果が出る毎に口頭および論文で発表していったものを、1本の論文にまとめ、東京工業大学に提出し審査の結果、学位(工学博士)を授与されることになった次第です。研究は趣味として続けてきたので10年という時間がかかりました。私の研究に興味を持たれた方は、メール(HGB02446@nifty.com)をいただければPDF形式にしました学位論文をお送りいたします(メール添付になりますが)。

さて、今、高校教育の現場では、教育改革の名の下に工業を学ぶ高校の統廃合が進んでいます。「ものづくり」の重要性が叫ばれているにもかかわらず。社会から、特に企業からは、高卒は「すぐにやめてしまう、定着率が低い」「基礎学力が不足している」「社会的な常識が欠如している」「就職難で大卒・専門卒が採りやすいので不要」等教育現場では耳が痛くなるような評価をいただいています。しかし、「現場の技術及び技能の伝承が出来なくなり、将来的に生産部門では困るので、現場からは高卒の採用希望を出しているが、人事が採用しない方針でいる」と言われたことも有ります。この話は、企業の方から直接伺った話です。これは、企業における教育力の低下を自ら認めていることにならないのでしょうか?。経済環境の厳しい今こそ、未来に向けての基盤としての技術及び技能の充実を図るべきだと、付加価値の高い高校における職業教育の実践を考えている昨今です。

最後に、通機会会員の皆様の益々なるご発展をお祈りいたします。(平成15年1月28日寄稿)

第17回 田中栄賞受賞者

平成15年9月

Alexandre Nikolaevich Goloborodko

(課程博士(工学))

「Fine Grain Structure Formation in High Strength Aluminum Alloy under Large Strain Hot Deformation Conditions」

(指導教官：酒井教授)

平成16年3月

Sutandyo Andiarwanto (課程博士(工学))

「粒界三重点における優先的動的再結晶の発現に関する基礎研究」(指導教官：三浦助教授)

瀧脇 大海 (課程博士(工学))
「多機能超小型ロボットの開発と顕微鏡下マイクロ
ロブリング」(指導教官:青山教授)
金森 哉吏 (論文博士(工学))
「角度の計測を基本とする位置計測法に関する研究」
(紹介教官:下条教授)
趙 会娟 (論文博士(理学))
「Theoretical and Experimental Studies on
Near Infrared Time-Resolved Diffuse Opti-
cal Imaging」(紹介教官:山田教授)

田中栄賞受賞にあたり

機械制御工学専攻 瀧脇 大海

この度は、田中栄賞を受賞することになり、大変
光栄でございます。これからも同賞の名に恥じぬ
ように、研究開発に専念する所存でございます。

修士課程から知能機械工学科の青山研究室で超
小型ロボットの研究を開始し、気づけば研究の面
白さにはまっており、周りが就職活動を行ってい
る時期にも、ひたすら研究を行い、自然の成り行き
で博士課程の進学を決めていました。現在、五年間
の研究を終了し、博士論文を完成するまでに至り、
十分に満足のいく成果を出すことができました。
これはひとえに熱心に指導して下さった青山教
授や先輩方、また一緒に研究をがんばった後輩た
ちのおかげと言えます。この場をかりて謹んで皆
様に御礼申し上げます。

田中栄賞受賞にとっても感激しています

電気通信大学 知能機械工学科 金森 哉吏

この度は私の学位取得に際しまして荣誉ある田
中栄賞をいただき、誠に有難うございました。さ
て、このテーマの原形に取り組んだのは本学機械
工学第二学科4年で梶谷研究室に配属された時で
した。その後、修士では幸運にも科研費が当たり、
博士後期課程進学の後1991年に中退して同研究室
の助手となりました。以来、元来の多情仏心、興味
の向くままあらゆる研究テーマに口と手を出し、
精密工学会の若手事業部会では同年代の多くの仲
間と講習会や見学会を企画し、その後ロボメカ工
房の設立から運営など、本当に楽しい大学生活を
送ってまいりました。もちろんこの研究について
は、時代とともに現れる新しいデバイスや概念を
次々と取り入れて、システム、計測法、計算法の拡
張と改良に取り組んでまいりました。従いまして、

博士論文としてまとめたものは、それらのほんの
一部に過ぎません。これまで装置の製作検査や膨
大な実験にご協力を頂いた企業の方、梶谷研究室
卒業生の皆さんにこの場を借りて感謝申し上げま
す。これまで常に、問題を提起し、その本質は何か、
そして具体的な解決方法はどうかあるべきか、どう
するか、それをどのように評価するかを模索して
きました。それについては今後も変わりません。ど
うか今後とも以前にもましてご支援のほどお願い
申し上げます。最後に皆様のご健康とますますの
ご発展をお祈りいたします。

学内情報この一年

1. 法人化

平成16年4月1日より本学は国立大学法人電気通
信大学が設置する形態となりました。

2. 教職員の異動など

平成15年7月1日

石田徹助手、大阪大学へ転出

平成16年3月31日

梶谷誠学長、退官

田中孝之助教授、北海道大学へ転出

見崎大悟助手、静岡理工科大学へ転出

中澤計勝技官、定年退職

社本雅信教授、西村芳康助教授、Shi Jie 助教授、
学内組織の変更に伴い総合文化講座へ転属

平成16年4月1日

大竹博助手、採用(田中研究室)

福島宏明助手、採用(松野研究室)

瀧脇大海助手、採用(青山研究室)

田幡秀典技術職員、採用(技術部)

平成16年4月21日

梶谷誠前学長に名誉教授の称号授与

3. 卒業生と新入生の記録

平成15年9月26日 9月期卒業式

大学院 機械制御工学専攻
博士後期課程1名

平成16年3月24日 卒業式

学部 機械制御工学科
Aコース8名・Bコース6名
知能機械工学科
Aコース103名・Bコース18名

大学院 機械制御工学専攻
博士前期課程 72 名
博士後期課程 2 名

平成 16 年 4 月 7 日 入学式

学部 知能機械工学科
A コース 106 名・B コース 34 名

大学院 知能機械工学専攻
博士前期課程 84 名
機械制御工学専攻
博士後期課程 6 名

学部編入学 知能機械工学科
A コース 6 名・B コース 2 名